



OB 会だより

国臨協 OB 会関東信越支部

2023年5月1日
 発行責任者：木下忠雄
 編集責任者：土井誠一
 事務局：〒135-0042
 江東区木場 6-13-5-707
 TEL：090-3437-4525



会長からの連絡事項など 木下 忠雄

会員の皆様には日頃より国臨協OB会関信支部に対して、ご理解御協力を賜り厚く御礼申し上げます。

① OB会総会開催中止について

今年もOB会総会開催時期が到来致しました。

今年度の総会開催決定は、2月末（私学会館解約料発生時期）までであり、役員会では会員諸氏より「今年は開催しようね！」とのお言葉も頂いた上での判断となりました。

何回かの三役会議の結果、COVID-19の状況や高齢者の感染・死亡リスクなどを議論しました結果、賛否両論でした。

マスク脱着やCOVID-19の5類への移行はありますが、高齢者への感染リスクは依然として解消されないままであります。開催はもう少し様子を見た方がOB会員の年齢を考慮してもその方が安全なのではないかという結論に至りました。来年の開催時には社会情勢も変わり、躊躇することなく開催されることを願って来年まで見送る事と致しました。会員皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

② 佐藤乙一先生の他界に思う

去る、2022年12月12日先生は老衰の為お亡くなりになりました。102歳でした。

佐藤乙一先生の生前につきましては、私がここで申し上げるまでもなく、会員の皆様はそのご功績を充分ご存知と思われま



ここで申し上げますとすれば、私が西武学園の顧問室に机を並べた15年間と、97歳で学園を退職されてからの5年間の事になるかと思ひます。

先生との会話では、うろ覚えや想像で話しましても、「それ何時のこと？」とか「誰の時代？」と厳しい質問が来ました。先生の胸内ポケットには「備忘録」と称する小さな手帳が有り、日記を付けられております。小さな文字でびっしりと書かれ、本人以外は読めません。疑問な点がありますと直ちに備忘録で確認されておりました。

先日、ご遺族の方から「遺品整理の前に必要なものが有りましたら選別を・・・」とお声掛けを頂きましたので、書斎に入らせて頂きました。備忘録の手帳が何十冊も積んでありましたが、個人情報に関するものには、^{さわ}触りませんでした。

また、先生は年度末が近づいて来ますと、「退職者の〇〇君、再就職は決まっているのかね？」といつも後輩の勤務先を心配され、紹介されておりました。

佐藤先生安らかに眠りください、有難うございました。(合掌)

長寿のお祝い

今年が該当者の方（80歳・昭和18/1/1～12/31迄）は同封の書面表決の葉書に、氏名と誕生日を記入しご返送ください。後日、お祝いの粗品をお送り致します。

佐藤先生の思い出（追悼文）

下杉 彰男(元・国立国際医療センター)

人生百年、本当にお疲れさまでした。

大正、昭和、平成、令和と激動の年月を駆け抜けて来られましたね。この間、臨床検査技師の身分の確立と方向性を示されたと同時に、後輩の指導育成に尽力されたことを謹んでお礼申し上げます。

最期にお会いしたのがコロナ禍の前でした。武蔵野の林間の中に佇まいする優雅な施設に入居されており、羨ましいと思いましたが、先生から見れば寂しさもあったのでしょうか。周りに多くの仲間がいても、話を共有できる人が少なかったのではと。娘さんが毎日のように訪れてお世話をされていましたが、一番幸せな時間だったのでしょうか。家族愛というものは素晴らしいですね。

私が訪れると、堰を切ったように昔話で盛り上がり、話題が途切れることなく本当に時の経つことを忘れてしまう感じでした。その時はご自身の歩んでこられた足跡が走馬灯のように思い浮かんだのだと思います。私のように旅行、スポーツ、遊びなど様々な多様性のある凡人と比べ、常に仕事一筋と思えるような、更に上だけを目指しているような姿は、やはり近寄りがたいものがあったような気がします。二人の会話が誰はばかることなく続いたのも今思えば不思議なことにように思えます。娘さんが来られたのも構わずに、夕食の案内が来るまでひたすら昔話に耽ったのですから。

帰りがけに、今日のような話ができるのは下杉さんだけだからといわれ、後ろ髪をひかれる思いで早めの再会を約束し別れましたが、コロナのせいで面会ができず、その思いを果たすことができなかったのは残念であり、悔やまれてなりません。

その時の話を思い出しますと、当然ながら、昔懐かしい恩師中橋勇次郎先生、そして星野辰雄先生との話が出てきました。私の退官記念誌の中で「師との出会い」の一文に、「人生は常に師との巡り合いという。私の技師生活では検査業務と人生観を中橋先生に、行政と組織活動を佐藤先生に、そして人生の機微を星野先生等に種々教えを

受け、更に多くの人々に巡り合い知己を得たことは…」と感謝の気持ちを表しましたが、更に、佐藤先生の投稿文に「偶然か必然か、氏は常に私の後を追ってきた。地方医務局の専門官がそうならば、日臨技会長も同じコースである。病名は異なったが共に在職中大病もした。これからの人生は共に身体を大切に、健やかに老いることを心掛けよう。」と記されています。定年後も、技師教育に関わってきたことも後を追いかけてきたと思っています。ただ、今の私には100歳を超えることは無理のようですが。

実は、私は先生と同一の職場で働いたことはありませんので、検査室でのエピソードを語ることはできません。最初の出会いは昭和20年頃、全医労の全国大会の会場です。常に病細協メンバー集合の指示が出され検査技師が集まったものです。私などは隅っこの方で小さくなっていたのを思い出します。先輩の検査技師が活動しているのを見て誇らしく思ったものです。その頃から先生は皆の先頭に立ってリードしていましたね。そうそう今頃奥様と青春時代を思い出して談笑されていられるのではと想像しますが。

二人の思い出話となると昭和47年厚衛協を立ち上げたときにことです。私は当時、公衆衛生局から関信地方医務局へ出向して一年目でしたが、東京・埼玉地区技師長を中核とし、各施設の筆頭主任を交えた役員構成でした。これを全国組織とするため、山口県で開催された国病学会の中で立ち上げ集会を開催し、会として当時の佐藤副会長と理事の私二人で参加し、30余名の全国のボス？連中を相手に喧々諤々、先ずは手拍子を打つことができ一安心しましたが。翌日、昼食をすし屋でご馳走になり、ついでに一杯までは良かったのですが、帰り際に出口でぱったりと地方局の幹部と鉢合わせ。一杯の酒でも真っ赤な顔になる私のためとんだ気まずい思いをさせてしまった事、誠に申し訳ありませんでした。私には盗み酒はできないということ、身をもって痛感させられた一時でした。

日臨技では、副会長、会長として、部下から出される文章を真っ赤になるほど修正しており、仲間から煙たがられていましたが、それほど行政に

精通されており組織運営という意味でも皆さんも大変勉強になったと思います。

思い出話は尽きませんが、紙面にも限りがあります。共に歩んだ道程で、60年もすれば、喜怒哀楽を感じたことは多々ありました。すべてを糧にし今日を迎えることができましたのも先生のお陰と感謝申し上げます。

最期に、私も皆さんのところへ伺いました折には、また、星野先生のお世話により、佐藤夫妻、星野夫妻、下杉夫妻による家族パーティーを開催しましょう。

安らかにお休みください。

合掌

ミャンマー連邦共和国における
「輸血ならびに造血幹細胞移植医療強化事業」
- 前編 -
稲葉 孝 (元 国立国際医療研究センター)

ミャンマー連邦共和国における「輸血ならびに造血幹細胞移植医療強化事業(医療技術等国際展開推進事業)」に参加(2018年から2020年)する機会がありまして、この様子を木下会長より会員の皆様に伝えて欲しいと依頼がありました。この場をお借りして、お話をさせていただきます。

ミャンマー連邦共和国は東南アジアに位置し、東側をタイとラオスと中国、西側をインドとバングラデシュとに接する環境にあります。日本の面積の2倍(676,578平方メートル、南北2,200km、東西925km)を保有し人口は約半分の国です。

国土は14の州/管区と67の地区、330のタウンシップ、64,817の村に分かれており、人口は毎年1%ぐらいの割合で徐々に増え続けており、年齢別人口分布から30歳未満の若年層が50%以上を占める若者中心の国です。最も多い年齢層は20歳から24歳で、全体の9.4%を占め人口分布としては、旧首都のヤンゴンに700万人が居住し、マンダレーには200万~300万人が居住しています。民族的には、人口の約70%程度がビルマ人ですが、国内に135の民族が存在しており宗教的には、国民の約90%が上座部仏教であり、その他、キリスト

教、イスラム教等が存在しています。

本事業は、医療技術等国際展開推進事業として2015年度より実施がされており、血液銀行事業並びに造血幹細胞銀行事業に関する日本の見識を習得することにより、ミャンマー連邦共和国において輸血並びに造血幹細胞移植業務を強化し、安全性向上に貢献することを目的としています。派遣される1年前には、現地医師、看護師らに造血幹細胞移植の凍結保存技術支援と、それに伴う患者管理の技術支援を施行しました。この継続支援に新たに、安全な輸血検査技術の力添えをするための派遣協力がありました。

血液事業は2003年にヤンゴンに設置されNBC(National Blood Center)を中心に、国の情勢に沿った血液事業と輸血医療の確立と普及、更に医療スタッフの教育を進めています。ミャンマー連邦共和国には全国均一な血液事業制度はなく、主だった機関340ほどが施設内にBTU(Blood Transfusion Unit)、ボランティア活動による献血、検査、血液製剤管理、そして輸血部門としての機能を取り仕切っています。

通常献血は100%が無償による献血ですが、患者家族が依頼するReplacement献血が残っています。感染症検査においてはNATも導入がされていますが、大半の機関ではABOとRh血液型検査、HBV、HCV、HIVと梅毒の簡易検査が実施されており、不規則抗体スクリーニング検査は実施されていない状況です。

NCGM(国立国際医療研究センター)は約10年にわたりミャンマー連邦共和国のJICAプロジェクトを通じて血液事業の発展を支援しており、数年前より日本赤十字社でも研修生の受け入れと専門家の派遣という形で協力をしています。そこでNCGMとNBCが企画した輸血教育シンポジウムにおいて、日本の血液事業とHaemovigilanceの考え方、制度をミャンマー国内の院長クラスを中心に医療技術関係者に伝えることを目的としました。日本ではGVHDの診断方法、血液製剤の放射線照射に関する技術的な問題点、血液事業の財政構造、副作用の救済制度に関する問題点がありますが、ミャンマー連邦共和国では無償である血液製剤が、日本では薬剤



(ヤンゴン第一医科大学病院前にて：女子医大血内、NCGMメンバー)として取り扱われ有償であること、医療機

関は保険制度から償還を受けること、血液製剤が適正に使用されたときに発生した副作用は国の補助と製造業者の拠出金により成り立っている救済制度の対象になることなどが、ミャンマー側では大変興味を持たれた内容です。

「次号に続く」

❖2023 年度 新入会員のご紹介❖

【ホットー息 自宅通勤】 吉川 英一

令和4年3月31日に相模原病院にて定年となりました、吉川英一と申します。現在は、幸運にも希望していた霞ヶ浦医療センターにて再雇用となり自宅より通勤させていただいております。相模原病院に異動したときは、定年後どうなるかと思いましたが、自宅に戻れてほっとしています。久しぶりの現場勤務で、病理検査は13年ぶりで四苦八苦しておりますが、働けるだけ良かったと感謝し、足手纏いとならぬように一生懸命頑張ります。OB会では新人となります。諸先輩の方々におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。



【変わりつつある故郷との往来】 上條 敏夫

国立精神・神経医療研究センターを最後に定年退職し、国臨協OB会関信支部に入会させていただきました。在職中は、その折々でOB会の諸先輩方よりご指導・ご支援を賜りましたこと、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。



近況といたしましては、東京と信州松本を行き来し、今まで手付かずであった実家関連の後片付けなどを行いながら元気に頑張っております。このほど、長い年月を経て全く変わらなかった実家近くのJR駅とその周辺において大規模工事が行われており、それにより変わりつつある故郷の風景を様々な懐かしさも感じながら観ております。コロナ禍の状況も変わってまいりましたので、皆様に直接ご挨拶できる日が待ち遠しく感じられますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、宜しく願い申し上げます。

新入会員のお知らせ

2023年3月31日付退職者の内、以下の方々がOB会に入会されました。(順不同)

- 佐藤 紀之 西埼玉中央 技師長
- 永井 伸浩 東京病院 技師長
- 渡辺 靖 西新潟中央 技師長

サラリーマン川柳

- ・「ドットコムどこが混むのと聞く上司」
- ・「ご飯と呼ばれて行けばタマだった」
- ・ご飯粒付いているから食べたはず



- ・「叱っても褒めても返事は「ヤバイッス」ちなみに「ヤバイ」の使い方
(あやしい、びっくりしている、おもしろい、楽しい、おいしい、感動している、緊張している、意味がわからない、かわいい、かわいくない、等々)

【編集後記】

新型コロナに翻弄されて早3年、ニュースで報じられる1日の感染者数に一喜一憂する毎日を経過していると、「天災や疫病に先人たちはどのように接していたのだろう」と思うことがあります。今日のように報道で情報を得たり、近代的な医療が無かった当時の人たちは、今の我々とは比べものにならないくらい不安であったと思います。そう思うと、疫病が流行るたびに疫病祈禱に建てられた柴又帝釈天の庚申塔や神社仏閣、はたまた路傍のお地藏様に祈った当時の人々の気持ちがわかるような気がします。(K・K)